内閣総理大臣賞（最優秀賞）

一滴との出会い

徳島県　阿南市立那賀川中学校　三年　笠江　駿

幼いころから川が好きだ。ずっと眺めたり、石投げをしたり、浅瀬に足をつけ水の冷たさを体感したりするのが好きだ。また、「加茂谷鯉まつり」というイベントに参加して、五月晴れの大空に数百の鯉が悠然と泳ぐ姿を見ながら、梶取船で遊覧するのも大好きだ。

そんな、川が大好きな僕を小学校五年生の時に祖父が「那賀川源流探検ツアー」に誘ってくれた。このイベントに参加したことがきっかけとなり、僕の中に「川を楽しむ」視点に加え「水を守る」視点が生まれたように思う。あれから五年間、僕は自分にできることを考え、行動に移している。

ツアーでは、那賀川の水の原点の一滴を自分の目で見て手で掬い、自分の口に流し込んだ。また、一滴の水が滴る様子をイメージして作られた源流モニュメントの美しさにも感動した。この体験を経て、僕の中で何かが変わったように感じた。僕が毎日過ごす街を流れている一級河川「那賀川」。その流れを見るたびに、「源流の一滴一滴の雫が集まったものなんだ」と考えると何とも言えない気持ちになる。この感動が僕を新しいことに挑戦する原動力となっている。

小学校の卒業式間近の三月二日に一斉休校が決まった。三カ月間にわたる休校期間は僕が新しいことにチャレンジする貴重な時間となった。まず、中学生になる直前の春休み、地域の清掃活動に参加した。軍手をはいて小さな鎌を持ち、ひたすら草抜きを頑張った。子供の参加は僕だけで、ご近所の皆さんから「偉いね。助かるよ。」と声をかけていただいた。「ステイホーム」が多かったので久しぶりに自然と向き合い、地域の幅広い年代の方々との交流ができたことに幸せを実感した。

中学生になり、以前から気になっていた近所の川に不法投棄されている家庭ゴミをどうにかしたいと思うようになった。市役所に相談の電話をしたが、「待つだけではいけない」と思い、自分で月に一度の清掃をすることにした。なかなか全てのゴミを拾うことはできないが、一つでも拾うことが、川を守る小さな一歩になると信じて続けている。数カ月を過ぎた頃、散歩をしている人や車で通りかかった人から「ご苦労様。」と声もかかるようになった。僕がゴミ拾いをする姿が地域の人の意識を変えることに繋がればと思い、家族でお揃いの「清流を守る」のTシャツも作った。確実に少しずつだが、以前に比べ川に捨てられるゴミが減り、川の水が美しくなっていることを実感できるようになった。

昨年から、家の畑に野菜の種をまき育てている。小松菜や水菜の日々の成長に水は欠かせない。水やりをしながら、改めて水の大切さについて考えた。実際に自分が野菜を育てる経験をして、田植えの時期には自宅の田んぼで苗が育っていく様子を、これまでとは違った視点で観察するようになった。

中学生活もあと一年。インターネット上の百科事典・ウィキペディアに阿南市の歴史や観光情報を書き込む編集イベント「ウィキペディアタウンプロジェクト」に参加した。世界中の誰もが見ることができるので責任の重さを感じるとともにやりがいも感じられた。ウィキペディアで情報を編集する学びを通して、コロナでたくさんのイベントが中止や延期となっても、世界中に水の大切さを伝えることができると気持ちが前向きになった。

今日も新規感染者数が発表されている。コロナ禍の時代を生きている人々は、否応なしに命の大切さを痛感している。そして同時に命を育む自然の重みを実感しているように感じる。そういった今だからこそ、僕は気持ちを行動に移したい。自分もコツコツと地道な活動を続けるとともに、インターネットを通じて僕自身も活動した「水を守る活動」の素晴らしさを一人でも多くの人に伝えたい。自ら発信することで活動の輪を広げていきたい。そう決意し、確かな歩みを続ける決意だ。